

砕かれる 生島治郎



生島治郎

砕かれる

碎かれる

一九七九年四月二十五日 第一刷発行

定 価 九八〇円

著 者 生島治郎

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二の五の十
郵便番号 一〇一

電話 出版部 (03)710-1661

販売部 (03)316-1661

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

© 1979 J. IKUSHIMA

0093-772191-3041 Printed in Japan

脱落者 7

シンジケート 30

挑戦 50

群狼の中へ 69

濁った河 89

野良犬 109

抗争 129

乗っとり 149

密告 169

裏切り 189

腐臭 209

ダーティ・ビジネス 229

麻薬ルート 249

首領 270

暴走 290

暗殺 311

装画

キタヤマ

リュウ

碎
か
れ
る

脱落者

1

凍てつくような汐風が埠頭から吹きつけてくる。二人の若者が、その風にきからうようにして、背をまるめ、歩いていった。

一人は背が高く、おそろしくがっしりした体格をしている。

もう一人の方も背は低くはないのだが、相棒の方があまりにも巨体のために、ほっそりとしてみえた。

「なあ、おい」

ほっそりした若者が、どこかい方につぶやきかけた。

「いったい、おれたちの組織はどうなるのかね？」

「どうなるというのは、どういう意味だ？」

肉に埋もれた細い眼を光らせて、大男は訊き返した。

「辺見、おまえおじけづいたのか？」

「おじけづいたわけではないがね」

辺見と呼ばれた若者は、投げやりな口調で答えた。
「おれたちのしていることになんの意義があるのだろうか」と近頃考えはじめたのさ」

「おれだからいいが、他の連中にそんなことをもらしてしろ。反革命分子として、手ひどい査問を受けることになるぞ」

大男はちらと辺見の表情をうかがった。

しかし、辺見の顔には、ただ虚ろな表情が浮かんでいくきりだった。

「おまえも知っているだろう。仲間たちの何人かが、反革命分子あるいはスパイの名の下に査問を受けたあげく処分された。それは組織の幹部だって例外ではない。おまえ、氣をつけた方がいいぞ」

「そういうこと自体がイヤになったんだ」

辺見は吐きだすように云った。

「他の連中は、革命という大義をふりかざして、いわば革命ごっこにうつつをぬかしているにすぎない。反革命分子として仲間たちを査問にかけている連中が、どれほどの革命運動をやったというのだ。また、現実には革命を起せるだけの可能性のある見通しを、われわれは持っているだろうか？」

「そう云われてみれば、そのとおりかもしれんな」

大男は苦笑した。

「おれたちは暴力によって革命を起そうとしている。ところが、実際に持っている武器といえ、せいぜい火炎壘か鉄パイプぐらいのもんだ。これでは、とうてい武装集団とは云いがたい。暴動を起そうにも、機動隊が出動してくれば、一目散に逃げるのが関の山だものな」

「機動隊ばかりじゃないぜ。いや、機動隊相手の武闘なら、まだ我慢ができる。ところが実際には、われわれがもっとも敵視し、おたがいに襲撃しあっているのは、同じ武装革命を志向している革連派だ。やつらとおれたちの組織は血で血を洗う抗争をくりかえしてきた。こっちが向うを殺したのが六人、向うがわれわれの仲間を殺したのは二人だ。負傷者の数はおたがいに十数人に及ぶ。同じ革命を志すものがこんなことをやっているといいのかね？ これじゃ、まるで暴力団の縄張り争いじゃないか。民衆の支持を受けられるはずもなく、いたずらに、警察の公安を喜ばしているだけだ」

「で、おまえはわれわれの組織から手をひきたいというのか？」

大男は眉をひそめた。

「まさか、今夜の幹部会でそんな発言をするつもりじゃあるまいな。そんなことをしたら、ただのリンチではす

まんぞ。おまえ、殺されるぞ」

「かもしれない」

辺見は口の端に冷笑を浮かべた。

「だからといって、こんな革命ごっこにつきあうつもりはない。おれがやりたいのは、本当の革命だ。チンピラ同士の殺し合いじゃないのさ。大義名分をふりかざして自己満足におちいっているやつらに、革命なんかできるものか。とにかく、おれは今夜かぎり組織からぬけるよ」

「そうか。そこまで思いつめているのなら、おれはなにも云うまい」

大男は白い息を吐きながら、天をあおいだ。夜空には星ひとつ見えず、今にも雪でも降ってきそうな気配だった。

「だがな、組織から脱けだして、どうするつもりだ？

たった独りで、おまえの理想とする革命運動をやるつもりか？ それでは、われわれがやっている革命ごっこより、もっと現実性のうすい活動しかできやしないぜ」

「あるいは、その可能性が強いかもしれないが、おれは自分で納得のいくやり方で、新しい組織をつくろうと考えているんだ。黒木、おまえ、おれと一緒に今の組織からぬける気はないか？」

「いや、おれにはそんな度胸はねえな」

大男の黒木はニヤツと笑つて、首を横にふつた。

「ただ、おまえから聞いたことは仲間の誰にももらしはしない。辺見、わるいことは云わんから、英雄気どりはやめろ。今夜の幹部会でも、そんな発言をするんじゃない。知らん顔をして、組織からぬけりゃいいんだ。おれならそうするな。リンチにあつて片輪にされたり、殺されたりしたら、それこそ、おまえがやりたがつていることもできなくなるんだからな」

二人はそのまま黙つて歩きつづけ、埠頭の入口に並んでいる倉庫の前で立ちどまつた。

倉庫のシャッターをつづけて二度、それから間を置いて三度たたくと、シャッターの横にある扉が開かれ、黒塗りのヘルメットをかぶり顔を大きなマスクでおおつて、眼だけのぞかせた男が顔を出し、二人を確認すると、身ぶりで中へ入れという合図をした。

倉庫のなかには、十人ぐらゐの男女がたむろしていた。もつとも、いずれも黒ヘルメットをかぶり顔をかくしているのので、どれが男だか女だかは判然としない。

しかし、その連中の敵意のこもつた眼が自分たちに突き刺さってくるのを、二人は感じとつた。

しかも、彼らは手に手に鉄パイプやゲバ棒をたずさ

え、すばやく二人をとり囲んだ。

「これはいったいなんの真似だ？」

落ちついた声音で黒木が云い、あたりを見まわした。

「今夜は、幹部会をやるはずじゃなかったのか？」

「シラを切るんじゃないよ、黒木」

グループのリーダー格らしい男が、にぎつた鉄パイプの先で黒木を差した。

「おまえが公安のスパイだということはわかつていたんだ。今夜は、おまえのスパイ行為に対する査問会が目的で、幹部に招集をかけた。覚悟はできているんだらうな」

「おれが公安のスパイだつて？」

黒木の細い眼が鋭く光つた。

「なにを根拠に、おれにそんな云いがかりをつける？」

「幹部のなかにスパイが居るということはうすうすわかつていたんだ。なにしろ、われわれ組織のすべてが公安に筒抜けになっており、アジトや行動の詳細が報告されていた形跡がある。それらを知っているのは、幹部でしかあり得ない。そこで、おれはこつちもそのスパイが誰であるかを、ひそかに追及することにした。幹部全員は行動を逐一見張つていたんだ。その結果、黒木、おまえが公安に内報している事実がわかつた。証拠はこのとお

りだ」

リーダーは数葉の写真を黒木につきつけた。

「それらの写真に覚えがあるだろう。おまえが公安の刑事と会っているスナップ写真だ。おまえはそうやって、われわれ組織の情報を公安に流していたにちがいない」
「なるほどね」

手にとって写真を眺め、黒木は無表情にうなずいた。

「たしかに、おれは公安の刑事と話し合ったことはある。しかし、そんな経験は、どの幹部も身に覚えがあるはずだ。公安の連中は決して甘くはない。おれたちの組織の幹部が誰かぐらいい知っているさ。だから、刑事に尾行させる。あるいは、刑事の方から声をかけてくる場合だってある。そういう現場を写真にとって、それを証拠にスパイ呼ばわりするとすれば、この場にいる幹部の誰もがスパイということになりはしないか」

「きさまは自分で同志を売りながら、そんな子供だましの云い訳が通用すると思っているのか！」

リーダーはヒステリックに叫んだ。

「きさまがそのつもりなら、この場で査問会にかけて、はっきり決着をつけてやる。みんな、これから黒木の査問会を聞く。この男に正座させろ！」

「そんな一方的な査問会はごめんこうむるぜ。あんただ

ちがやろうとしていることは、査問会でなくて、集団リンチだ」

黒木は腰をおとして身がまえた。

「おれをリンチにかけられるものなら、やってみろ」

「この裏切り者！」

リーダーが黒木に向って鉄パイプをふりおろした。巨体に似合わず、黒木はすばやい身のこなしでその一撃をやりすごし、逆にリーダーの腕をかかえこんで、鉄パイプをもぎとった。

「やめろ！」

辺見はリーダーと黒木の間割って入ろうとした。彼にとつて、こんな事態になろうとは思ってもよらなかった。裏切り者として査問を受けるのは、自分自身だと覚悟して、ここへやってきたのだった。

2

辺見がリーダーと黒木の間割って入ろうとする前に、黒木はリーダーの胸を強く押した。

巨体でもあり、それだけに腕力も抜群である黒木に押されて、リーダーはひとたまりもなく背後にすつとび、あおむけに倒れた。

それがリーダーの怒りをますます駆り立てる結果になった。

「みんな、かれ！」

とリーダーは叫んだ。

「裏切り者を粉砕しろ！」

その声に応じて、黒木のまわりをとりまいていたヘルメット姿の男女たちが、それぞれの武器をにぎりしめ、ひしひしと輪をちぢめた。

「待ってくれ」

辺見は、とびだしていった、黒木の前に立ちふさがった。

「黒木が公安のスパイであるかどうか、まだ確証はない。確証もないのに、査問もせず、いきなり集団リンチにかけるつもりか」

「そいつは査問を拒否したんだぞ」

リーダーが起きあがりながら、憎悪をむきだしにした口調で云った。

「査問を拒否したのは、自らスパイを認めたのも同然じゃないか」

「それはあまりにも一方的な決めつけ方だ」

そう答えながら、辺見はむなしさを感じざるを得なかった。

彼と黒木をとりまいている連中には殺気がみなぎっている。

彼はその男女の一人一人をよく知っていた。

いずれも同じ組織の幹部であり、同志として、地下活動をつづけてきた連中ばかりである。

幹部になるだけあって、よく勉強もしているし、頭もよく、ある意味では、純粹な若者が多い。

しかし、そういう個人としては秀れた素質を持った若者たちが集団となり、組織をつくると、教条主義になり、自己の判断を忘れて組織の意志のままに動くロボットと化す。

その点では、暴走族と大した変りはなかった。

いま、彼らは組織の意志に反した裏切り者として、黒木をみなしているのは明らかだった。

リーダーの飛躍した暴論を批判しようとはせず、むしろ、自分たちの目の前にすえられた絶好のいけにえをこれから存分にいたぶってやれるという楽しみに舌なめずりしている気配すらあった。

「おい、辺見、やめておけよ」

黒木もその気配を察したらしく、覚悟を決めた声で云った。

「こいつらは、はじめから、おれを集団リンチにかける

つもりだったんだ。査問会なんて形式にすぎない。どうせ、やられるんだったら、おれも黙ってやられてはいない。できるだけの抵抗をしてやる」

「その言葉だけで、黒木がわれわれの組織に対して重大な裏切り行為を働こうとしているのは明白だ」

リーダーは仲間たちをあおりたてた。

「辺見、きみにも警告しておくが、黒木をかばおうとするなら、きみ自身もやつと同類とみなすぞ」

「そうみなされてもかまわんよ」

辺見は、むなしさが怒りに変っていくのを覚えた。

「おれはこんなやり方には、もうあきあきした。黒木と同類とみなすのなら、そう思ってもらおうじゃないか」

「バカを云うな。おまえまで、おれのとばっちりをくうことはない」

黒木の声は真剣だった。

「おれとおまえと二人きりで、この連中を相手にできるわけはないんだ。二人とも殺されるぞ。犠牲者はおれ一人でたくさんだ」

「いいんだよ」

辺見は微笑した。

「なにも、おれはおまえとつきあうつもりで云っているんじゃない。おれ自身の意志で、こんな組織は下らない

と云っているんだ。どうせ、さっきも云ったとおり、おれは組織から抜けるつもりでいたんだからな」

「どうやら、この二人は、あらかじめ、われわれの組織の分裂をはかろうと企んでいたらしい」

リーダーの憎々しげな声が響いた。

「これで二人ともグルだということがわかった。この二人を処分しないと、われわれの組織が破壊される。みんな、そう、思わんか？ やつらを抹殺するか、われわれが抹殺されるかだ」

「やつらを抹殺しろ！」

誰かが叫ぶと、二人をとりまいた連中は、異口同音に応じた。

「異議なしッ！」

「やっちなえ！」

それらの言葉は、個人的な疑問や批判をふりきってしまおうとするかけ声のように聞えた。

もし、そのかけ声で自己を駆り立てなければ、自分も二人と同じ犠牲者の立場に置かれなければならないという怖れも多分にあったにちがいない。

いずれにしても、彼らはマスヒステリアの状態におちいっていた。

「この野郎！」

竹槍を持った男が、黒木めがけてつきかかったのがきつかけだった。

十人ほどの男女が、二人めがけて襲いかかってきた。

辺見は、自分めがけてふりおろされる鉄パイプを、あやうくかわし、そいつの股間を蹴あげた。

そのまま、倉庫の壁際へと走る。

まわりをとりかこまれては不利だと判断したからだった。

壁を背にすれば、少くとも、うしろから襲われる心配はない。

壁を背にして、一息入れたとき、またもやもう一人の男が鉄パイプをふりかざしてせまってきた。

今度は、辺見の方から先制攻撃に出た。

右拳で相手の顔をねらうとみせかけ、相手がそれをよけようとしたすきに、左足のまわし蹴りで、相手の脚を払った。

辺見は空手二段の腕前である。

彼の強烈なまわし蹴りをまともにくらって、相手は横倒しになり、コンクリートの床にしたたか身体を打ちつけた。

黒木の方も、巨体と腕力にものを云わせて、むらがり寄る連中をなぎ倒していた。

彼が鉄パイプをふるうと、ヘルメットをかぶっているも、かなりの威力があるらしく、殴られた男は、その場にうずくまってしまふ。

とはいえ、辺見が空手二段の腕前であろうが、黒木が巨体の持主であろうが、武器をたずさえた十人の男女を相手にして、二人きりですべての連中を倒せるはずはなかった。

黒木の背後から襲いかかった一人が、彼の頭めがけて鉄パイプをふりおろそうとしているのをみとめ、辺見は叫んだ。

「黒木、危い！ うしろだ！」

しかし、その時はもう遅かった。

鉄パイプの一撃を後頭部に受けた黒木の巨体がぐらりと揺れ、自分の手に持った鉄パイプを落した。

それでも倒れはせず、ふりかえりざま、その相手の首を両手で絞めあげる。

相手はおそろしい力で絞めあげられ、たちまち、ぐったりとなった。

だが、黒木自身も後頭部が裂け、傷口からおびただしく血をしたたらせている。

そんな黒木めがけて、背後からさまざまな得物がふりおろされるのが、辺見の眼に写った。

さすがの黒木も、乱打を浴び、前のめりに倒れかかる。

「黒木！」

辺見は黒木を助けるために、そっちへ向って走り出そうとした。

そのとき、横から、もう一人が鉄パイプをふるって襲いかかってきた。

ヘルメットをかぶり、マスクをしているものの、女だということはあきらかであり、辺見は、容赦なく相手を打ち倒すことに、一瞬、ためらいを感じた。

それがいけなかった。

身をおわしただけで、こっちは攻撃をしかけずに、黒木の方へ走り寄ろうとした辺見に対して、女はしつこく食い下った。

二度めにふるった女の鉄パイプが辺見の胸をとらえた。

鈍痛が肋骨を走りぬけ、辺見はよろめいた。

ここぞとばかり、女は鉄パイプをふるってくる。

辺見は、痛みをこらえながら、左手で女の右腕をつかみ、右拳をみぞおちにたたきこんだ。

女はその場に崩おれたものの、黒木を倒した連中が、今度は全員で辺見の方に襲いかかってきた。

こうなれば、もはや、抵抗の術はなかった。

辺見は夢中で戦ったが、腕に肩に背に、さまざまな物がふりおろされ、次第に全身がしびれてきた。

そのうちに、頭部にはげしい一撃を受け、彼は意識を失ってしまった。

3

辺見は意識を回復するときに、まだ、仲間たちからとり囲まれているような感じが残っていた。

身体中のあちこちに激痛が走ったのが意識をとりもどした最初の感覚で、思わず、うなり声をもらした。

うなり声をもらしつつも、なんとか自分の身を防がなければならぬと反射的に考え、両手を動かそうとしたが、両手はなにかに縛りつけられたみたいに自由が利かない。

(もう駄目だ)

と彼は観念した。

(このまま、やつらにめった打ちにされるだろう)しかし、せめて、眼を開けて、この暗黒の世界から逃れだしたかった。

眼を開けなければいけないと、必死で、重いまぶたを